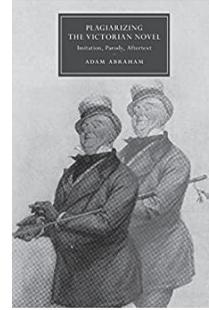


書 評

Adam Abraham,
*Plagiarizing the Victorian Novel: Imitation,
 Parody, Aftertext*
 (Cambridge: Cambridge UP, 2019)



松本 靖彦

本書が研究対象とするのは、ヴィクトリア朝に活躍した3人の作家——ディケンズ、ブルワー＝リットン（以後ブルワー）、ジョージ・エリオット——の作品に基づいた模倣作、続編、パロディ、改作、海賊版等、通常文学史では「正統」とはみなされない作品群である。これら3名の影響で産み出されたテキスト（本書で *aftertext* と命名される）の詳細な分析において、著者はそれら副次的作品群の存在意義、文学史上の位置づけの再評価を行い、「作品」という概念自体を拡張しようと試みる。即ち、特定の文学作品に触発されて産み出された *aftertexts* も同作品の一部としてみなされるべきだと著者は主張するのである。これは例えば Bos 名義で発表された *Oliver Twiss* や *The Penny Pickwick* 等、Thomas Peckett Prest による「類似品」も「本家」ディケンズ作品に含めて考えるべきだという思い切った提案である。

本書の袖には、著者が扱う問題として「剽窃と引喩はどう区別したらいいのか？模倣はパロディとどう違う？著作権侵害とオマージュを分かつ境界線は？」等の問いが挙げられ、「知的財産問題はオンライン上で海賊版が跋扈する我々の時代のはるか昔から議論されている」と書かれている。著者はこれらの事柄すべてに（少なくとも間接的には）触れてはいるものの、袖の表現は（宣伝としては有効だが）本書の内容について誤解を招きかねないと思う。『ヴィクトリア朝小説を剽窃する』と表題でうたっている本書ではあるが、本書の主題は同時代の著作権（知的財産）問題でもなければ、

文学的模倣やパロディの精緻な分類でもない。

本書の主眼は、端的に言えば、これまでの文学研究において基本的に「偽物」(時には屑か滓同然)として扱われてきた *aftertext* に脚光を浴びせることにある。著者は、主に以下のような理由から *aftertext* には重要な意味と役割があり、文学史から除外されるべきではないと論じている。

1. *Aftertext* はもとなった作品・作家研究に貢献する

Aftertext の作者たちは(作家としてはともかく)読み手としては一流であり、もとなった作家の文体的特徴や欠点、作品内の重要なテーマ等に鋭く反応している。人気作家の成功にあやかりとうとしたにせよ、特定の作家を批判・攻撃することが主な動機であったにせよ、もとの作品の筋書きで納得がいかない部分を書き換えたかったにせよ、*aftertext* には当時何が当該作家の魅力あるいは欠点と考えられていたのかが克明に記録されている。つまり、*aftertext* はもとなる作品への理解を深めてくれる優れた批評なのであり、その作品が同時代の読者にどう読まれていたかを今に伝える受容史上の貴重な史料でもあるのだ。

2. *Aftertext* は作家の自己形成に影響を与えている

「本家」の作家たちにとって *aftertext* は迷惑千万以外の何物でもないが、彼らはただ手をこまねいて自作が利用されるのを許していたわけではない。ピクウィック・クラブの設定を真似た模倣作品の興隆に業を煮やしたディケンズは、自作を真似されにくくするため、それまでとは異なる語り的手法を模索した。一方、パロディを通して自分の文体を徹底的に酷評されたブルワーは、独自の文学理論によって自己の文学の正当性を主張しようとした。また、*Scenes of Clerical Life* の真の著者は Joseph Liggins という人物だと主張する一派に悩まされたエリオットは、同作の単行本版を出版する際、作中人物 Mrs. Liggins の名前を Mrs. Higgins に書き換えている。このように、*aftertext* は(著作権侵害や「なりすまし」以外の何物でもない事例も含めて)「本家」の作家に対応を迫り、彼らの執筆活動に何らかの影響を与えたと考えられる。そうだとすれば、個々の *aftertexts* を単なる剽窃や文学史の屑として無視するわけにはいかず、それら作品群も文学生産の場において一定の役割を果たしたとみるべきである。

上記1. 2. はとりもなおさず本書全体を貫く論点でもあり、これで本

書の最も重要な主張は大まかに紹介できたと思われるので、以下、章ごとの内容を簡潔に紹介したい。

序章で著者は、古代ギリシャから近代に至る西欧文学におけるオリジナリティーと剽窃、模倣、パロディの歴史を概観し、それぞれの語義を吟味した上で、本書中、最も重要な鍵概念である *aftertext* を導入する。G rard Genette が用いた *after-texts* という語を基にし、著者はそれを次のように、本書で研究対象となるすべてのテキストの特徴を網羅することのできる語彙として用いる。彼によれば、ヴィクトリア朝の *aftertexts* とは、先行作品と複数の意味で“after”の関係にあるテキスト群のことである。即ち、それらは特定の作品以後に出版され、その作品や著者の何らかの特徴に倣っていたり、もとの作品や著者を攻撃せんとつけ狙っている作品を指すのである。最後に著者は、上記3名の作家が研究対象に選ばれた理由と、本書においては演劇(化)作品が原則的に研究対象から除外されている理由に触れる。

第1章と2章はディケンズ作品の *aftertexts* を扱い、それらが単なる模倣や贋作以上の存在であることを示す。第1章は *The Pickwick Papers* の *aftertexts* (「〜クラブ」の活動を中心にした模倣作と *Pickwick in America* のような番外編)が、ディケンズの文体やテーマの特徴(ならびに人気の要因)を明らかにしていること、最初期の読者の反応を生々しく伝えてくれること、また、ディケンズが示唆するに留めている反ユダヤ人主義・人種・性の問題に露骨に触れていることなどを指摘している。第2章の前半は *Nicholas Nickleby* の *aftertexts* の分析を通じて、「偽物」の *aftertexts* が何が本当にディケンズ的(Dickensian)と言えるのか的確に教えてくれることを例証し、後半は法に訴えることを含め、ディケンズが *aftertexts* 対策として行った選択が彼のその後を方向づけた可能性について論じている。

第3章と第4章は、ブルワー作品への攻撃から産まれた *aftertexts* の分析である。第3章は、1827年から1838年までの期間において、いかに彼のもったいぶった文体が批判者たちの好餌となり、パロディ中心の *aftertexts* を産んだか、それに対してブルワーがどのように自己弁護を展開したかが論じられる。著者は、その自己防衛が彼独自の文学理論の構築を促した可能性について論じ、また、彼の反撃そのものが、同時代の文学嗜好がリアリズ

ム小説へと向かっていったことの表われだと指摘している。第4章は、ブルワー作品のパロディを——つまりはブルワーのように——書くことを通して自己形成を成し遂げた2人の作家の分析である。まずは、ブルワーを嘲るために彼の文体を自家薬籠中の物としたサッカレーが、作家としての自分自身の語り口を見出した時、ブルワー批判から卒業する経緯が語られる。それから、危うくブルワーに一生「狂女」に仕立て上げられるところだった妻のロジーナが作家になり、夫の弱みを知り尽くした立場での鋭く強かな攻撃を続けた挙句、攻撃対象のブルワーに同一化したような文章を書くに至る様が論じられる。

エリオットの *aftertext* を扱う第5章で著者は、上述した Liggins の実像に迫り、*Adam Bede* や *Daniel Deronda* (ユダヤ人への拘りが余計だと考え、改作を企てた文学者が複数いた) の *aftertexts* を分析し、歴史に名を遺すエリオット崇拝者、Edith Simcox について論じる。エリオットのようになりたかった Simcox の場合、彼女の作品だけでなく人生そのものが *aftertext* なのだと言っている。

終章は、本書の論点を簡単に振り返った上で、近年の neo-Victorianism にも触れ、20世紀から今日までに産み出された Victorian *aftertexts* の内容と特性について論じている。

最後に評者の所見を手短かに記す。広範な第一次資料の渉獵を経た上で、「本家」のテキストと *aftertexts* とを丹念に読み比べ、両者の文体上の類似点を指摘していく著者の論証は手堅く、上述の論点1. には説得力があった。一方、2. の方の説得力は今ひとつ。*Aftertexts* が「本家」に対応を迫ったり、何かの端緒となったとはいえるかもしれないが、彼らの執筆活動や人生を決定的に方向づけたとまでは言いきれず、その影響はあくまで限定的なのではないだろうか。本書は確かに文学史上の *aftertext* の重要性について読者の蒙を啓いてくれるが、その一方、著者も *aftertexts* 作家の技量が全般的に見劣りすることは随所で認めていて、皮肉なことに「本家」のテキストと *aftertext* との間の質的差異も際立つように感じられた。とはいえ、著者が整理して提供してくれる第一次資料の情報は有益であり、各章はそれぞれに読み応えがある。剽窃や著作権問題というより *adaptation* 研究に関心のある方に一読をお薦めしたい。

著者は Virginia Commonwealth University のポスト・ドクトラル研究員（本書刊行当時）。ヴィクトリア朝文化研究に関する単著としては本書が初となる。ハリウッド映画・アニメーション研究者でもあるが、本書が読み物としても面白く読めるのはそのせいだろうか。彼が終章で示唆している通り、1960年代のコミックを基にしているからといって *The Amazing Spider-Man 2* (2014) を「偽物」と断ずる者はいないだろう。本書の着想は、そのように「原作」と adaptation の序列が無意味になった現代の価値観をヴィクトリア朝文学に適用したところにあったのではないかと愚考した。

今後も大胆で刺激的な論点を提供してくれそうな研究者である。

——東京理科大学教授